

記念号によせて

院長 大 木 金次郎

青山学報の第一三〇号に、本学の女子短大の島崎学長が、短大図書館の増築工事完成の報告とともに現況報告と将来への積極的な教育指向を叙述している。現在、相当数の女子短大で定員割れの発生が予想されているなかにおいて、百余年の日本の女子教育の伝統を保持してきた本学の女子短大の二十一世紀に向けての抱負を解説できることは欣快に堪えない。勿論、女子短大としての出発は昭和二十四年の新制大学制度の発足後からではあるが、戦前の青山女学院の専門部とそれ以前の女子中等教育の高度の閥歴の伝統を引き継いでいるものであることはいうまでもない。

(i)

中央公論の十一月号の中の「大学倒産の時代がやってくる」の評論において、青山学院の名称をあげて、厚木キャンパスを開いたのに、十分生き残る大学であるとしている点は興味深いものを感じる。現在、「臨教審の第二次答申」の第4章「高等教育の改革と学術研究の振興」のなかの第1節高等教育の個性化・高度化の(2)高等教育機関の多様化と連携の部門で、短期大学については、学科や教育課程の多様化、教育内容の弾力化を図るという記述があるが、この中で、短大には、高等教育機関として四年制大学に連続する面と、職業能力の育成の面とがあるという。今後それぞれ質的に高められることが望ましく、それぞれの短大が学科や教育課程を多様化し、教育内容を自由に

裁量し得る余地を増大する方向で弾力化すること、また短大は地域社会と密接な関係にあることから、今後は、短大によってはコミュニティー・カレッジ化も視野に置くべきであるという。

わが国の高等教育における根本的に困難な問題は、一般教育と専門教育を相対立するものとしてとらえる通念が醸成され過ぎていることである。これは主として四年制大学の課題ではあるが、短大においても一応は留意して考量してみる必要がある。一般教育は、理解力、分析力、思考力、構想力、表現力等を培養する知的活動の基盤をなす自意識の鍛錬となり、学問や文化を創造する基礎的な資質を養成する手段となるから短大教育においても緊要な要素である。近年、しばしば一般教育無用論が論述されているが、一般教育は、基本的に各大学や短大のそれぞれの教育理念に基づいて教授せらるべきものである。

更に臨教審の審議の中で、短大においても外国語を積極的に学習せしむべきであって、その到達度を高めるための教育方法や教育体制を改善していくべきであると主張している。専門教育は、一方において高等教育が大衆化し、実生活が向上進歩するにともない、他方、専門領域や課題の拡大にともなって進展すべきものである。また国際化時代といわれたり、情報化社会とも称せられていくこの頃であるが、これらの現実にも協力していく必要が大いに存することを認識しなければならぬと思う。

青山学院は女子短大の外に四年制の総合大学を維持しているので、この四年制大学は女子短大と密接な関係を保持して、短大の卒業生をかかれらの希望に応じて最大限に門戸を開放して三年次学生

として受け容れるべきである。滿二カ年間フルに時間を活用すれば、不足している一般教育科目と専門科目の必須単位を学習することは可能であるからである。殊に昭和六十四年末には、本学の正門横に十二階の新館とそれに向って右横に七階建の大学十一号館も新築されるので、学生の収容人数の点で、厚木キャンパスとともに十分に学生の受け容れは可能である。この新館の十二階層は国際会議場としても使用可能であり、階下は数教室と教授の個人研究室、各学部学科別の付置研究所として使用できることを目指している建物であるので、短大との学際間の研究をこの校舎の中において行うことも可能である。

このように新築校舎は女子短大の専任教授との連携の研究目的にも十分に使用できると思っている。
青山学院女子短期大学の「第四十輯記念号」の発行を心から祝福申し上げる次第である。